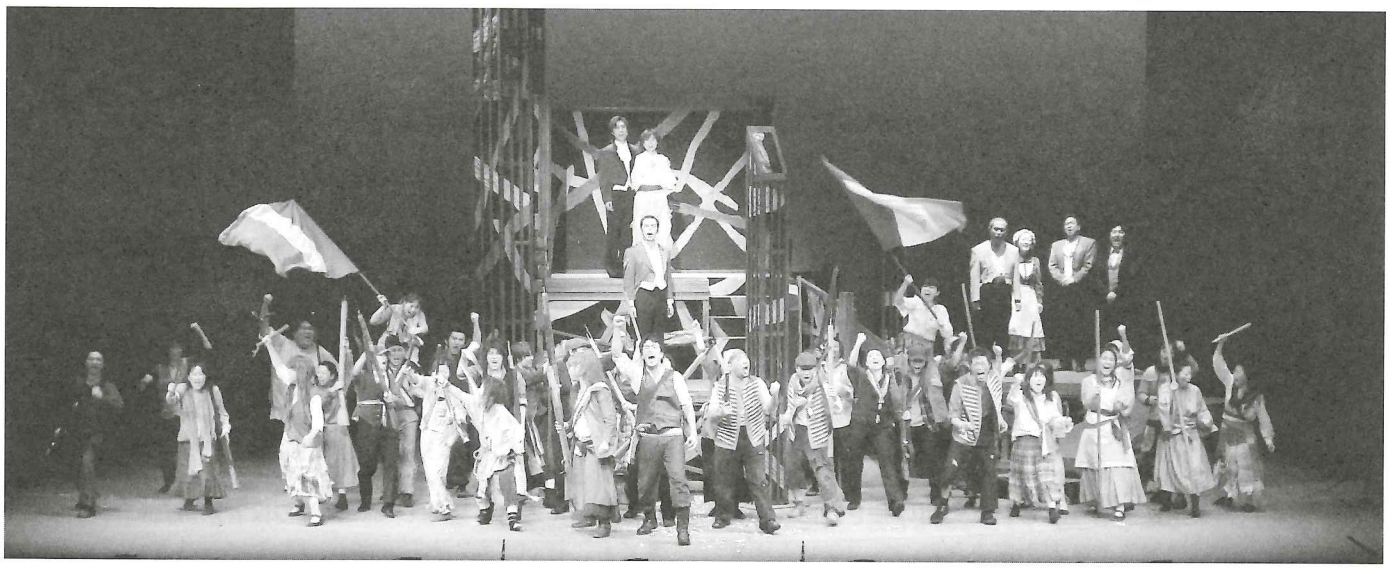
【第61号】2011.3.25発行

DRAMA かながわ 61

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866

神奈川県演劇連盟は、震災によって亡くなられた方のご家族へ哀悼の意を表します。
そして、災害に見舞われた人々の無事と一日も早い復興をお祈りしています。



一つ山を越えて

神奈川県演劇連盟理事長・劇団河童座　横田和弘

昨年暮れに50周年記念合同公演「二都物語」の活気溢れる公演が　無事終了した。制作・スタッフなど　幾つかの問題点はあったかもしれないが　若い力の台頭は　それを圧するだけの評価を　これからの神奈川県演劇連盟に対して　内外に示されたものと思う。

そしていよいよ今年は51年目。その評価に応える年となった。多分　この号のドラマ神奈川が発行される頃には　稽古・準備に拍車がかかっているものと思われるが　ＫＡＡＴ・神奈川芸術劇場での　３週間にわたっての　春の県演連フェスティバルが開かれる。

ＫＡＡＴについては　今更語る必要はないが　鳴り物入りの中でのオープンした劇場である。その柿落としの年度に神奈川県演劇連盟が　ＫＡＡＴの主催事業に選ばれたのだから　意義深い。しかも　ホールでのラインナップは　県演連の前週が　三谷幸喜作品。そして　次週が　宮本亜門作品とこの上ないハードルのなかでの　公演となる。

今年も　大きな山を越えなくてはならない。合同公演が続き　劇団活動に支障が……との声や　事業に振り回されすぎ……の声も聞こえないではない。確かに　功罪はあるかもしれない。しかし「功」はめったにやってこない　チャンスである。今回のチャンスは　自分たちの力だけではなく　計算出来ない流れや勢いが偶発的に作り出されたものかもしれない。「罪」は　前に述べた「声」かもしれない。でも　これは自分たちの力　意思で乗り越えられるかもしれない種類のものであると思う。

ＫＡＡＴとのかかわりは　これからの連盟にとって　大切なものになると思っている。青少年センター　ＫＡＡＴ　この二つの劇場との関係が　うまく機能すれば　神奈川県演劇連盟の未来は　本当に明るくなる。問題は　逆にそれに応えられる力を　いかに県演連が持つことが　出来るかということである。それには　連盟傘下の劇団をもっと　幅広く増やさなくてはならない。新しい劇団や　演劇人の拡充こそが急務に思う。

最後に　若さがあるからこそが財産などとは　思わないで欲しい。神奈川県演劇連盟の強さは　力強い経験と実績に裏づけされた　老いていまだ若々しい演劇人が幅をきかせていることである。だからこそ　若き人材が集い　活動を続けられる場が提供されているのに違いない。劇団内の　双方の闘ぎ合い　劇団間の芝居感の闘ぎ合い　老いも若きもの闘ぎ合いが　お互いを尊重しあいながら　進めてゆけば　劇団の未来も　県演連の未来も明るいものになるはず。

芝居創りにかかわる者は　常にポジティブであるべきだと思う。山を越えれば　きっともう一つ上の新しいステップが用意されていることを　願い　信じて100年に向かっての第何歩目かを　また力強く踏み出したい……そんな想いを　年明けに感じた。

前向きに　前向きに……これが今年の　スローガン……。

（平成23年１月１日　未明）

神奈川県演劇連盟50周年記念合同公演
「二都物語」

「50周年公演を終えて」

演出　土井宏晃

昨年の９月から12月19日までの約三ヶ月間、演出という立場でかかわらせていただきました。「二都物語」一瞬で終わってしまう、演劇というジャンルの芸術を多くの方々の汗や涙、熱い思いで作り上げることが出来たこと。そして、力あるスタッフさんや出演者と共にできたこと。また神奈川県演劇連盟50周年の記念すべき年に大きな任をいただいたこと、この場をかりて心より御礼申し上げます。

自分自身の演劇経験のなかでも、なかなかの挑戦であることはまちがいありませんでした。ふだんは100人～300人の劇場で演出をしている私にとって不安な要素本当にたくさんありました。大きな舞台、多数の出演者、多様な集団、はじめてつかう機構などなど、あげていけばきりがありません。たくさんの人からアドバイスをもらいました、知恵をかしていただきました。それがどれほど舞台創りの助けになったかは言うまでもありません。本当にありがとうございました。そして、そこに神奈川県演劇連盟という集団の強さがあるのだと自分自身、本当に知ることが出来ました。

この「二都物語」という作品を創っていた、三ヶ月間は本当に幸せな日々でした。小学生から70歳をこえる方々まで、同じ土俵に立ち意見を言い合い、本番という一つの目標に向かっていく一体感。その中に私がいれたことを誇りに思っています。創作活動において大切なことは、常に己との戦いであり、ゴールの見えない所へ飛び込んでいく勇気、探究心であり、好奇心であります。この作品に多くの人がつかってくれたことを本当に嬉しく思っています。

そして、もう一つ大切なのは、その創作活動の過程の中で何と出会ったか。誰と関わったのかと言う事です。芸術とは、より多くの人と関わっていこうとする意欲の事だと思っています。この意欲がある限り、誰かが集ってくる限り、神奈川演劇連盟は先に進むことが出来ると確信しています。芸術の不思議なところは、それが個人的なものであるのにも関わらず、社会的なもの、社会的意味をもっていくところであります。優れた芸術は常に社会的なものに変化してゆきます。個人的なものがいつしか社会を動かしていくほどのパワーや熱になっていくのです。言いかえるならば、芸術は個人から生まれたものを、社会的なものに変えていく行為とも言えます。

今回のこの公演で、反省点もたくさん見えてきました。参加する人数が増えるにつれて時間の調整が難しく、限られた時間の中での稽古をしなければならない。稽古場に来ても出番がないなど、稽古の進め方を改良する必要があると強く思いました。そして、今回の一番の反省点は、神奈川県演劇連盟という多種多様な集団が集って来るために責任の所在があいまいになっていく、というところだと思っています。

最後にもう一度、「二都物語」にかかわったすべての人に感謝いたします。本当にありがとうございました。

「二都物語　感想」

鯵坂絵美

『合同公演への協力をお願いします！』と演出の土井さんがうちの劇団へ来たのは９月だった。

あれから三ヶ月。どんな作品に仕上がったのかと期待を胸に劇場へ。出会いの前半、混乱と狂気の後半。面白かった。とても楽しかった。楽しくて、怖くて、そして悲しい世界に入り込んで観る事ができた。

難しい題材の舞台だったが、楽しませる工夫が沢山あった。二人の男性が話しながら歩き、その間に舞台が回転するシーン。役者二人はただ歩きながら話をしているだけなのに、後ろの舞台だけが回る。そして二人が立ち止まると、装置も停止した。ぴったりと合った動きと廻り舞台を生かした演出に思わず『おぉ』と声を漏らしてしまった。

舞台の上に『パリ』『ロンドン』の看板があり、場面によってどちらかに照明が当たる。同じ舞台装置でも違う場所で起こっている出来事なのだと理解することができた。

また、馬車を旗に見立てたり、戦いで使っていた棒を檻に見立てたりと、わかりやすく、すぐにお客さんがわかる演出の工夫が随所にあり、そこに役者の熱意が加わり、素敵な舞台になったのだと思った。そして市民達。この市民達には全体を通してとても感動した。大勢の役者が舞台に一度に出てきても、皆がきちんとその場面でやるべきことをその役になって一生懸命演じていた。市民の時には貴族への怒りをぶつけ、貴族側になった場合には本当に嫌な奴に見えた。憎しみで市民の心が変わってしまう様子など、観ていてとても怖かった。あの時代を必死で生きた人達の気持ちが伝わってきて、涙がでた。

主役の三人もとても素敵だったと思う。ダーニーは少し化粧が濃かったものの優しさがにじみ出ていて好感が持てた。カートンは歌う部分も素晴らしく、ルーシーを思い歌うシーンでは感情が伝わってきて涙が出た。ルーシーはとても美しかった。しかし『ルーシーはとても美しく心が優しい』という設定なのはわかったが、市民達に感情移入してしまっていた私には『何の苦労もしていないお嬢様』に見えて、だんだん腹が立ってきた。

女主人とのやり取りで『私の為に助けてください』というようなセリフがあったと思うが、なんでそんなことを平然と言い出すのか理解できなかった。二人の男性から愛され、銀行員や使用人達からも愛されていたルーシー。でもなんでそんなに愛されるのか？優しいから？美しい心をもっているから？？あまりにも出番やセリフが少なく、また、すぐに歌になってしまい、ルーシーの愛される秘密がよくわからないまま終わってしまったことが少し残念。

様々な色を持つ劇団から集まった人達が作り上げた『二都物語』かぼちゃの馬車でもなく、河童座でもなく、麦の会でもなく……あれは『合同公演　二都物語』だった。50周年記念にふさわしい、とても素敵な作品だったと思う。

また、この作品に参加した多くの劇団員達にとっても、忘れられない素敵な経験になったと思う。その経験を生かし、それぞれの劇団に戻っても頑張って欲しいと心から思った。

「劇評にならない劇評」

横田和弘

平成22年12月の「二都物語」の舞台を観ての劇評ではなく少なからず稽古場から関係を持った者の評だから　純粋な劇評にはならないことを　おことわりしておいた。
正直　稽古が進められ　本番が近づくにつれ　ディケンズのこの「二都物語」の凄さ　怖さ　奥深さを感じ始めていた。
正直　それこそ試験問題の知識程度にしか「二都物語」を意識していなかった。台本を読んだ時も　恥ずかしながら　舞台空間であるとか　段取りとか　スタッフワークであるとか……内容より　50周年公演の芝居創りにしか注意がいかなかったことを恥ずかしく思う。
背筋に何かを感じ始めたのは　歌ができて　市民たちの力強いアンサンブルのシーンが　輝きを見せ始めてからだった。
ディケンズのこの作品で描きたかったこと　想いがわかってきたような気がした。ディケンズが書きたかったのは　革命讃歌でもないだろうし　カートンの愛の苦しみでもなければましてや革命を背景にした恋愛でもないだろう。
人間に潜む　残虐性　狂気がテーマであり　その残虐性や狂気を引き出すのが　正義の御旗を掲げた時の戦であり　革命であり　つまりは戦争なのだ……とのメッセージだと確信に似たものを感じ始めた。
その確信は　１幕の最後の市民たち《役者たち》のキラキラ輝くひとみを観たとき……気持ちよく　誇り高きヒーローにでもなったかのような自信に満ちた表情を観たとき……そして本番の舞台の上での役者の　顔を観たときにより確かなものとなった。作者の想いと　演出の想いと　そこに舞台に住む魔物までが加わって　人間の狂気の不気味を　恐ろさをより感じさせたに違いない。
市民を演じていた役者たちが何を感じながら演じていたのかが　本当に興味深い。土井演出が語っていた　サッカーのゴールをした時を思い浮かべて……との意味を　どう解釈したのだろうか……。
全てを計算しつくして……というのであれば　残酷ではあるがその演出力を評価したい。
印象に残ったのは　つまりは１幕の最後の　市民たちの立ち上がるシーンであり　ギロチンに狂喜するシーンであり　私の中ではそれがすべてかもしれない。
他に　あえて気づいたことを挙げるとすると　いくつかある。土井演出が　繰り返し語っていた　レ・ミゼラブルのようにとの想いは舞台を観て強く感じた。少し　レ・ミゼに似たパフォーマンスが多いのは気になるが　集団をまとめ切る演出力は見事だったと思う。ただし　そのアンサンブルの面白さに比べ　ストーリーが負けていたような印象が残念でならない。単純に　セリフが聞こえずに　観客としてはかなり　フラストレーションを感じていた声を耳にした。仕込みを見ていたものとしては　ＢＧのレベル合わせも満足できなかった状況も原因とも思えるが　観客に言い訳はできない。早くしゃべることを要求されたのだろうが　テンション高く叫ぶことを要求されたのだろうが　やはり観客にとって　何を言っているのかわからないのはじれったい。
舞台は　美術も照明もドタバタしていた仕込みの中では　よくここまでと思うほど　きれいだった。強いて言えば　せっかく盆がまわり　機能的な転換が行われるのだが　セットの色使いが　360度似ていたために　せっかくの変化の印象が薄れていた気がした。両そでわきのパネルの存在が　多分転換や　捌けのために作られたのだろうが　余計なものに思えた。
そして　一番気になったのは　やはりラストシーンの扱い方か……。
私的には　今回の芝居の大きな象徴と思える　ギロチンにもう少し印象的に……などと思うのだが　これは余計なお世話か……。
細かい　重箱をつつき始めたら　きりがない。賛否両論出る作品ではあるのかもしれないが　そのほうが演劇的価値はあるものと思う。
今回の演出を含め若手を中心とした舞台がここまで出来上がったことを　お世辞抜きに拍手を送りたい。嫉妬と自慢と連盟の将来への安堵を込めて。
最後に　この作品に出会わせてくれた　土井演出に感謝する。
いつかなぜこの作品をと聞いてみたい気もするが　そんな野暮なことはやめておこう。
想いを自由に馳せられるのが観る者の特権なのだから。

「二都物語観劇レポート」

高津一郎

（１）劇化された「二都物語」を見た。

このチャールズ・ディケンズの代表作である長編小説「二都物語」を脚色し、構成・演出に当たったのは、演連内の演出者の中で若い世代の一人である土井宏晃（風雲かぼちゃの馬車代表）で、その若さの特権ともいうべきものの姿をこの芝居で見ることになった。

土井は小説「二都物語」に感動し、８年の歳月の中でその劇化のイメージを育て、そして上演という大きな夢を演連の多くの仲間たちの協力を得て、合同公演というシステムによって実現させたわけだが、土井の「二都物語」上演に寄せた強い執念については之を支持したい。

更に、実際の舞台処理で見せた若さから発するエネルギーと果断さなども併せて評価されるべきだと思う。

と同時に、その若さ故なのか、舞台上の表現に見られた不足や過多などの問題もある。そのことについては逐次取り上げていきたい。

（２）「二都物語」の骨格は二つのラインを駆使して組み立てられている。

一つ目は、罪もないのにバスティーユの独房に18年間も監禁されていたドクトル・マネットが解放されてドファルジュという男の酒場に預けられている。そこへイギリスから娘のルーシーがドクトルを引き取りに来るところから始まるストーリーである。

二つ目はドファルジュの妻をめぐるストーリーなのだが、彼女についての物語＝事の真相は芝居の後半になるまで明らかにされていない。

実はドクトルと妻ドファルジュを結びつけている出発点になったのは18年前に起きたある凄惨な殺傷事件である。犯人は当時フランスでもっとも悪名高い貴族サン・テブレモンド侯爵兄弟。彼らは妻ドファルジュの家族３人を殺傷し、その

手当のために連れてきたドクトルの口を封じるために彼を18年独房に閉じ込めておいたのだ。

しかし事件の全貌が暴露されるのは第二幕後半にある人民裁判の法廷の場まで待たなければならない。これでは遅すぎるのではないだろうか。せっかくナレーションという手法を使っているのだから、芝居のトップシーンでの仏・英の状況報告の後、サン・テブレモンドによる非道な殺傷事件のあらまし、それから妻ドファルジュとドクトルの不幸な体験と彼らの苦悩の一端でも語られていたら……。観客である私は、もっと緊張感を持って芝居の流れに乗っていけただろう。

そこで話はいっぺんに芝居のラストまで飛ぶのだが、ここではもう状況の大変動があって舞台はフランス革命の真っ只中である。ルーシーと結婚したダーニー（サン・テブレモンド侯爵の息子だが貴族の特権を放棄して教師をやっている）が家令を助けるために渡仏するが彼自身も亡命貴族として逮捕されて死刑が宣告される。更に、妻ドファルジュによりルーシーとドクトルも一緒にギロチンにかけようとする陰謀が進んでいる。これを察知した弁護士カートンは、ドクトル一家を逃亡させダーニーを救出してルーシーに戻す。そして自らはダーニーの身代わりとなって断頭台の露と消える。その直前カートンはこう呟く“今わたしのしようとしている行為は、今までわたしのしてきた何よりも尊い行為であるはず。”これを聞いたとき、“えッ”と驚いた。全々カートンらしくないからだ。

その代わり、カートンの心情を深いところで受け止めているルーシーが現れて、静かにカートンの行動に対する感謝の気持ちを語る……。そういう終わり方もあったと思う。

（3）「二都物語」の展開されていく舞台の中で特に目立ったのは群衆場面の構成であった。

廻り舞台の上に据えられた異形の舞台装置。まるで迷路のようなその構造物、白地に太いかすれた黒線で描かれた迷彩は不気味で、そして不吉な感じを放出していた。

そのような装置の内部から湧き出るように、また両袖から滲みでるように、更に観客席から雪崩れ込むように自在に現れる群衆の動きは、まるで大波のうねりのように舞台に迫力のあるダイナミズムを生み出すことに成功していた。群衆たちは一つの意志となって走り廻り、一つの心となって叫び続けたのだ。そして響きわたる音楽……。素早く切り変わる照明……。その密なる連係……。

ところが群衆場面が見せた躍動的な迫力に対して、主要な登場人物たちのドラマをみせる役者たちの表現、そのまとまりとしての場面の方がもう一つ屹立してこないもどかしさがあった。

そうなったことの理由のひとつは、ほとんどの役者たちが目いっぱい声を張る（劇場空間への対策もあったろうが）発声法をとっていて、どうも舞台の会話が単調に聞こえてしまうことが多かったことが深く関わっているようだった。

いい例が、弁護士カートンの役作りだ。自分では堕落してしまってもう駄目なんだと決めてかかっているが、役作りの方は意外とキチンとしていて普通に見えた。出来る役者がカートン役の作りを何故あの程度に止めてしまったのか……、分からない。しかし、彼のセリフの内容から察すると一種の破滅型の人間で、見た目も自堕落で、感情の揺れ動きも大きく当然その声も乱れ勝ちになる筈だ。一本調子の発声ではやれる役ではない。そういう人間がルーシーに誓った＜無償の愛＞の約束を果たすために、ダーニーの身代わりとなって断頭台の前に立つのだ。自堕落から身代わりまでの落差が＜愛＞を大きく浮かび上がらせることになる。

以下、役者たちの仕事について一言ずつ書く。

○＜妻・ドファルジュ＞革命を侯爵に対する私怨を晴らすための道具として民衆を思いのまま煽動する激情女にはなったが、プロスとの争いでは殆ど狂気にまで高まってしまった方がいい。

○＜夫・ドファルジュ＞は何時の間にか群衆の中から消えていた。普通人に戻る……、ように演じられていたようだった。

○＜サン・テブレモンド侯爵＞驕慢な貴族であることは表現されていたが、あの独白“なんなら、ベッドの中で、そのまま焼き殺してしまってもいいぞ”のところでは、彼の凄惨な本音を剥き出しに出来たのでは……。

○＜ドクトル＞獄中生活の空白からの回復。ダーニーを自分の家族として受け入れる為の苦悩……。その二つのシーンを自分の芝居で見せる場面がなかった。そのためかドクトルの人間像に何となく曖昧なところが残った。

○＜ロリー＞終始にこやかな紳士として振る舞っていたが、銀行やダーニーの救済にフランスに乗り込んだ時は、男の気概を見せて欲しかった。

○＜プロス＞ルーシーを養育し、同時に家政婦として働いてきた堅実なイメージだが、妻ドファルジュの危険に向かい合った時一気に闘う女に変身できた筈だ。

○＜ダーニー＞生まれのせいか一本気で信念を貫いていく好青年に見えた。

○＜ルーシー＞三人の男たちに愛されるが、父の仇一家の出身であるダーニーと結婚する。同時にカートンの想いも受け入れる包容力の大きな女性であったことが後でダーニーの命を救うことになる。いかにもそのような心優しい女性には見えたが、愛の中でキラキラ輝いている姿も見せてよかった。

○＜ジャック・バーサット・ジャド、他……＞数多くの、革命の闇の中で蠢く者たち。それは革命の道具であり、また或る時は革命の風のように見えた。

（4）以上思いつくままに色々書いてきたが、数ヶ月にも及ぶ活動の進行を見ながら、何時も想っていたのは、この「二都物語」をドラマとして創り上げるのは実に大変な大仕事であったろうということだ。

＜県演連＞の創立50周年を記念する合同公演に様々な役割を背負って参加された皆さんには心からご苦労様でした、ありがとう……と云いたい。

青少年センターホールで舞台を見て、今の若い世代の人たちには「不条理な限界状況」についての実体験はまず無いだろうし、認識も浅いかも知れない。にも拘わらず此の「二都物語」という芝居で「革命状況」を虚構として演ずる体験を持ったということの意味は何だろう……。

この場合、演ずる方も観る方も、単なる演劇体験に止めないで、一人一人の人生のどこかに触れてくる……、ということにならないものだろうか……。

私自身は戦争も安保も体験しているものだから、若い人たちとは異なる立ち位置でこの「二都物語」に向かい合うこととなった。そこで私は、「革命」という不条理な大状況に翻弄されて、苦しみ、斗い、夢を求めた人間たちの「運命」を見た。主役は「運命」であったと思う。

神奈川県演劇連盟神奈川芸術劇場公演

TAK in KAAT開催します

来たる４月22日～５月８日までの３週間にわたって、神奈川県演劇連盟では、３つの企画を連続開催する「TAK in KAAT～根づく、芽吹く、花開く～」と題した演劇公演を行います。

TAKとは THEATRE ASSOCIATION of KANAGAWA つまり神奈川県演劇連盟のことです。

KAATとはKANAGAWA ARTS THEATRE、神奈川芸術劇場が打ち出している通称です。つまり、簡単に言うと神奈川県演劇連盟が神奈川芸術劇場で公演をやるという意味のタイトルです。51年目を迎える神奈川県演劇連盟が新しくできたばかりの神奈川芸術劇場で、演劇を根付かせ、芽吹かせ、花を開こうという思いがサブタイトルとしてつけてあります。

この公演は、

湘南･西相地区の３劇団が中心となって行う湘南･西相地区合同公演。**「八月のシャハラザード」**（作 高橋いさを 演出 緑慎一郎）　**⇒４月22日～24日中スタジオ**

子供向けの内容を中心に、子供から大人まで一日楽しめる９つの企画公演。**「観よう！遊ぼう！たのしもう！あそびば」**　**⇒４月29日～5月1日中スタジオ**

県演劇連盟メンバーを中心に総勢80名にも及ぶ大メンバーで行う神奈川県演劇連盟合同公演。**「黒船がやってきた」**（作･演出 横田和弘）　**⇒５月７日、８日ホール**

の３企画で構成されています。

湘南・西相公演では、今まであまり触れる機会がない同地区の演劇人たちの公演に触れてほしいという思いと、神奈川県演劇連盟内での交流を深めるとともに、神奈川県では横浜以外にも各地域で演劇活動を行っているという確固たるアピールをしたいと考えております。

「あそびば」では、明日の演劇人へとなっていく子供たちに、県の演劇連盟および県内で活動する団体の多岐にわたる良質な表現活動に触れてもらう環境を創るという考えの下、演目の間の時間にも子供たちが触れられる環境を整えていくために遊べるスペースや一日券で自由に演劇に触れてもらえる機会を提示したいと考えております。

県演連合同公演では、80名近くにわたるキャストを県演連、外部から集め、県演連理事長である横田和弘が、大人数芝居ならではの群舞や歌を折り混ぜて、神奈川の史実や伝説をふんだんに取り入れた珠玉の演目で、神奈川県の演劇が元気だということを自らアピールします。

と、いう主旨で動き出し、各グループ稽古や打ち合わせを重ねてきていた３月11日に東北地方太平洋沖地震が発生しました。私たちの生活は大きな変化を迎え、東北地方に住む方々は今、尚、大きな困難に立ち向かわれていることと思います。そんな中、果たして演劇公演を行うべきなのかという大きな議論が演劇界でも起こっております。演劇をはじめとするエンターテーメント業界は自粛するべきだという動きもたくさんあります。

ですが、我々は芸術劇場公演を行うべきだと考えております。演劇には人を勇気付ける力があります。劇場で公演を行うことを自粛して、演劇という文化活動を行うことをやめてしまっては演劇が衰退してしまいます。ＮＨＫは娯楽番組を動画配信サイトに無償提供しました。テレビ東京は画一的に同じ内容を繰り返し報道する他民放と異なりいち早くアニメの放映を再開しました。緊迫した事実を見つめるだけで人は生きていけないのです。演劇にも人の心を豊かにする力があると信じています。ですから我々は今、上演をやめるわけにはいかない。そう信じております。

３月11日（金）に発生した東北地方太平洋沖地震および続く余震により被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧を深くお祈り申し上げます。

総合制作：笹浦暢大（ラゾーナ川崎プラザソル）

芝居を観る

2010年11月～12月

横須賀市民劇場プロジェクト
「歌うシンデレラ」

作／別役実　演出／羽賀義博

2010年11月13～14日　於：県立青少年センター多目的プラザ

これまで「横須賀市民劇場プロジェクト」の芝居を見たことがなかった。失礼ながら名前すら存じ上げていなかった。それだけに、どんな舞台を作るのだろう、しかも料理が難しい別役ものをどう見せてくれるのか、楽しみにしながら、11月13日の多目的プラザの公演をほぼ満員の客とともに見た。

舞台は森の中。中央にどーんと大きな木、その前にテーブルと椅子が置かれ、木の枝から「よろず相談・長ぐつをはいた猫事務所」と書かれた看板がふらさがっているだけの、別役らしいシンプルな装置だ。この森を同プラザ南東コーナーに三角の形で横広に作った。このような舞台位置取りは初めて見たが、森の奥深さを出すには良かったと思える。

役者陣は皆それぞれ個性的だ。さらに凝った衣装が役としてのキャラを一層高め、観客は役者の持ち味を十分楽しめた。猫、母、姉妹、仙女……。惜しむらくは個性が強かっただけに、役者間のハーモニーと言おうか、役者同士の連帯性が欠けて見えはしなかったか、どうか。それは演技陣が会話としてお互い相手に向かって話さず、必要以上に観客に向かって台詞を言うこととも関係してはいないだろうか。あるいは個性が強いがゆえに反発しやすいこの劇団の今後の大きな課題なのかも知れない。

それにしても衣装は圧倒的だった。仙女の頭の作り、王子、継母、どれもこれも手が込んでいた。シンデレラだけが彼女らしく実に質素な格好だったが、これが逆に効果を生んでいた。それを含めて舞台における衣装の力をお手本のごとく見せつけた。それだけに脚本にない風役の少年をせっかく登場させたのに、半ズボン姿の日常スタイルではなく、役らしい衣装を着せてほしいと思ったのは私１人だろうか。

今回の舞台は作品から言ってもいわゆる別役らしい透明感のある冷ややかな舞台ではなかった。もう一つの別役ものを見せていただいたなあとの思いを持ってプラザを後にした。

［劇団きさく座：一花徹］

劇団川崎演劇塾
「法王庁の避妊法」

作／飯島早苗・鈴木裕美　演出／渡邉綱男

2010年11月12日～14日　於：相鉄本多劇場

今回、初めて「劇団川崎演劇塾」の舞台を拝見し、初めて劇評なるものを担当した為か、いつもと違う緊張感で劇場に入りました。「法王庁の避妊法」とはユニークな題名だと、以前から思いながらも、それにあまり気を止めることもありませんでしたが、実際、「ローマ法王も認める避妊法」となると凄い事なんだと、改めて思いながら観劇。

作品は、月経周期に関する「荻野学説」を荻野久作が発見する過程を巡って繰り広げられる、先生とその周囲の人々の物語。始終、研究のことが頭から離れない先生、その研究を支えてきた妻。妻の妊娠によって変化する家族愛。姑の命。子どもが出来ない患者、子どもがどんどん生まれて生活に困る患者。子どもの死産と母親のお産による死。先生自身の人生も含め、そんな周囲の様々なことが、「何のための研究なのか」と言うことを追求していきます。

その舞台となる病院の診療室と待合室は、出入りする人々の空間として、調度よく感じられましたし、時間経過や季節を思わせる表現でしょうか、診療室の書斎机にある花瓶の花が暗転後、度々変わっていることに目が行きました。が、もっともっと、この空間を右往左往して、あばれて欲しかった気もします。

「子どもは授かりもの」「望まれない子ども」と妊娠、出産は人間の命の価値についての大きなテーマです。だからこそ、「何のための研究」なのか追及した先生の情熱や、死産と急死の母親のシーンなどは唐突ではなく、たっぷりと観てみたかったところです。

全体的には、作品のもつ暖かさや優しさが、出演者から感じ取ることが出来、また先生の優しいキャラクターも好きでした。音楽もこの作品を包み込む感じが合っていて心地よかったです。

「子どもは天からの授かりもの」と言う言葉に、はっとする懐かしさもありましたが、避妊法が見つかっても、産むか産まないか、女性自立問題等、現代に通じるものもありました。自分は「天からの授かりもの」を信じているのですが、男性にはこの物語の持つテーマを本当に理解できるのかしらと、最後におもったのでした。（そう思うと、荻野先生はやはり凄い人ですし、この作品をとり上げ、先生を演じた村田さんも凄い！）

［まりこ☆みゅーじあむ：川井眞理子］

劇団蒼い群
「箱根強羅ホテル」

作／井上ひさし　演出／秋風涼華

2010年11月13日～14日　於：横須賀市立青少年会館

今回の劇団蒼い群さんの芝居「箱根強羅ホテル」は実話を元に作られた、劇作家井上ひさし氏の作品です。

昭和20年春、閉鎖中の箱根強羅ホテルに外務省参事官が訪れ、ホテルの管理人に「近々、このホテルにソ連大使館を疎開させると伝える。疎開受け入れ準備のため集められた一癖も二癖もある使用人数名とホテル管理人、外務省役人がドタバタをまき起こす

喜劇です。

時代はまさに戦時中なのですが、どこかのんびりとした空気が流れるコミカルなやりとりが面白かったです。特に使用人の中に紛れ込んでいた憲兵、海軍、陸軍の各工作員が、他の者に気がつかれないように行動していたがちょっとした事からお互いが工作員だと気がついてしまう所です。秘密の暗号の事で盛り上がったり、ホテルの一部を爆破する計画が失敗に終わったりとお客さんの笑いを誘っていました。

他に印象的だったのは、管理人から洋風のパジャマを支給されてはしゃぐ女性使用人を見て使用人の１人が「米国軍の侵攻を受けている沖縄や戦場では沢山の方が死んでいるのに我々はこれでいいのか……」と自責の念に駆られる姿が、この芝居をただの喜劇で終わらせずに戦時中の物語である事をよく表していました。

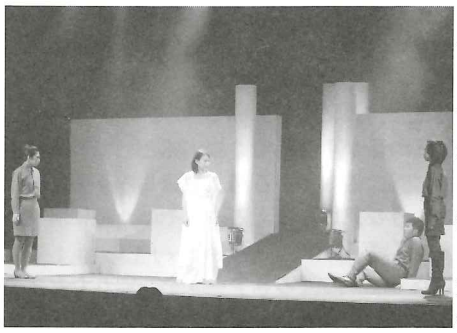
所々で役者が劇中歌を歌われて芝居をより楽しく表現していたのも良かったです。戦時中という事にあまりとらわれず、全体的にコミカルに描かれていた のが良かったと思います。

［劇団河童座：大木　崇］

演劇プロデュース『螺旋階段』
「REMIND」

作・演出／GREEN

2010年11月13～14日　　於：小田原市生涯学習センターけやき



あなたは幸せですか？

とてもシンプルな問いだと思います。けれど、そのシンプルさゆえに、答えるのが難しい問いなのかもしれません。

芝居はこの問いにまつわるお話でした。

会場に入ると、シンプルな線と色でつくられた素敵な舞台が目に飛び込んできます。始まりは駅のホームから。電車が通過する際の照明がこれまた素敵で、目を奪われていると、突然、日常と思われた場面が非日常へと展開。電車を待っていた深沢歩の前に謎の人物が複数現れます。彼、彼女達の狙いは一体何か？　まず人物設定が少し説明されるか、と思いきや。良い意味で雑談とも言える会話で煙にまかれてしまいます。この会話がとても日常的で、だからこそ良いな、と思いました。日常の持つ力強さ、と言いますか。この会話が、非日常かと思われた世界観に日常の要素を加え、果たして、いま見ている芝居は日常が舞台なのか、それとも？と、気付けば不思議な世界観に引っ張り込まれていました。コメディ要素の強い前半から、「悩める人、死のうとしてる人を豪快に治す連盟」通称「ナシゴ連」の登場によって不穏な空気が次第に強くなっていきます。ナシゴ連は誰かを幸せにすることで幸せになれる、という。まっとうな言葉だけれど、発しているナシゴ連は略称の親しみやすさとは裏腹に怪しい。団体に入った梶原飛男は、深沢歩を幸せにするために行動します。が、誰かのためを思ってしたことが、その誰かを幸せにするとは限らない。そこに生じる歪みと悲しさが切なかったです。けれど。最後、あなたは幸せですか？と梶原に問われ、深沢歩は答えます。それは、芝居の最初から最後まで貫かれた問い「あなたは幸せですか？」に、しっかりと答えが出された瞬間でした。芝居の余韻は、痛々しくも暖かなものでした。エンディング曲の歌詞が、芝居の余韻と重なり合って胸に残りました。　　［劇団やぶさか：水尾綾子］

劇団かに座
「ら抜きの殺意」

作／永井　愛　演出／馬場秀彦

2010年11月19～21日　　於：関内ホール・小ホール

創立六十年、百１回目公演、半世紀を越えて公演を重ねて来たことに敬意を表します。

今回「ら抜きの殺意」のパンフレットで馬場氏は、正しい日本語、美しい敬語表現は言葉芸術であり、きちんと継承すべきとの文を読み、幕開きを心待ちにしていた。

幕が開き、役者が動きだし、セリフが聞こえてくると、もう一度目を凝らし、耳を傾けて舞台に集中し座り直した。

「あれ、いつもの“かに座”の芝居と違うな」と感じた。セリフのテンポが違う、動きが違うともう一度舞台に魅入った。

ら抜きの言葉から始まって、正しい日本語どころではない職場に、一人の男が入って来る。そこからドラマが動く。

ら抜きの訂正から始まって、丁寧語、謙譲語、尊敬語の正しい使い方、話し方と若い人にとっては、何が何だか解らなくなっていく過程がおもしろく描 かれていた。

人と話すのがこんなに大変だったとは、仲間、客、目上、上司と使い分けなくてはならず、人と会話することができなくなる、それがうまく表現されていた。私もこの芝居は観る度に、今まで、はたして自分も正しい日本語を使えていたのか考えさせられる。

今回、若手がとてもよかった。馬場演出が伝わって素直に表現できていた。努力して稽古を重ねた結果が舞台に現れていたと思う。大変良い舞台だったが、気になったことを一言、役者の登場と退場が「ザツ」すぎる、せっかくの舞台がもったいない。

これは、役者の役割でもあり基本的なことだか、演出の責任でもあると思う。これからの「かに座」に期待すると共に、楽しみでもある。　　［劇団よこはま壱座：河住靖一］

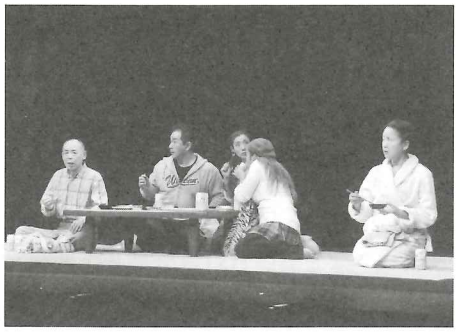
劇団横綱チュチュ
「でき・あ・い」

作／菱倉あゆみ　演出／団のぼる

2010年11月20～21日　　於：磯子区民文化センター杉田劇場

劇場に到着すると、既に多くのお客様が着席されていました。特に親子連れのお客様が多く見られ、中には小学校に上がるか上がらないかほどの小さなお子さんもいて、静かに観られるのだろうか？と正直、少し不安になってしまいましたが、幕が上がり芝居が進むにつれ、どんどん芝居の世界に引き込まれていきました。

まず最初の舞台は、私たちが日常でよく見るゴミ出し場。その側には電柱と、背景にはランドマークが。一見シンプルな舞台だ



けれど一つ一つがリアルに作られていて、日常の一コマを切り取ったようでした。そんなゴミ出し場にやってくるのは、賑やかな近所のおばちゃん二人組に、ゴミ出しルールに関してちょっと厳しい住人さん、大家族で元気いっぱい、明るく朝の挨拶をして学校に行く子供達、他にも世話好きで溌剌とした主人公の義理母さんや、義理母さんの尻に敷かれている義理父さんなど、次々と登場する多彩で魅力的な人物たち。役者陣の年齢の幅広さにリアリティがあり、それが更に芝居を盛りあげているように感じました。また、それぞれの家庭にドラマがあり、一つ一つのドラマがとても面白く、とても心が温かくなりました。中でも一番印象に残っているのが、主人公である人形作家の女性です。

人とコミュニケーションを取るのが少し苦手な主人公は、近所に住む子供から「友達の誕生日プレゼントに人形を贈りたいから人形の作り方を教えて欲しい。」と頼まれます。最初は戸惑いつつも、人形作りを通して子供と話すうち打ち解け、自らも仕事である人形作りに励む、という場面に感動しました。

面白さと楽しさと、心がじーんと温かくなった、あっという間の１時間半でした！　［G/9-Project：仲満響香］

京浜協同劇団
「黒と白のピエタ」

作／和田庸子　演出／杉本孝司（東京芸術座）

2010年11月26～28日、12月３～５日　於：スペース京浜

今回のお芝居はドイツのケーテ・コルヴィッツの生涯を日本ではじめて舞台化ということなので、とても楽しみにしていました。

ピアノの弾き語りで舞台の幕が開き、その当時のドイツの貧困層の人々の苦しみ、それでも必死に生きていく人々の逞しさがとても伝わってきました。

そんな人々の美しさを白と黒の世界で表現していくケーテ・コルヴィッツというひとりの女性の強さにとても引き込まれました。

戦争で息子を失うという大きな悲しみにも負けないで、自分の思想を貫いて最後は政府に強制収容所に収監されても決して折れない一人の女性の強さにとても感動しました。

さらに、こちらの舞台は転換の音楽などが全て生演奏だったので、ちょっとしたミュージカルを見ているようで、とても楽しめました。お茶のサービスやケーテ・コルヴィッツの原画展など、きめ細かいサービスもあり、最後までとても心地よく拝見できました。また是非見に行きたいです。ありがとうございました。

［劇団麦の会：片倉舞子］

劇団葡萄座
「赤いくつ」

作／中村俊夫　演出／山本伸二

2010年12月11～12日　於：テアトルフォンテ

物に溢れた現代に生きる私たちが戦後の焼け跡に生きる人々を演じることは本当に難しいことなのだろうなと思った。65年という歳月が流れ、こんなにも世の中は変わったのだ。

客電が落ちると、いきなりサイレンが鳴り響き客席がサーチライトのごとき光の明滅にさらされる。爆撃機ともとれる幾何学模様の明かりが走り、まるで星や雪のように見える瞬間があり、劇場とさっきまでいた日常とこれから始まる物語が混ざり合っていくようだった。聖歌とステンドグラスのセットも物語への期待を膨らませる。良い幕開きだ。

焼け跡のセットの上、戦後の時代を懸命に生きる人たちが現れると、私の中に実感という言葉が浮かびはじめた。今では私たちの周りに当たり前のようにある物をこの当時の人たちがどんな思いで手に入れたか。見たことが無いものへの憧れや食べたことが無いものの味わい方。すぐ隣にある死や愛するものを守りぬく力。劇中に出てくるハーシーのチョコやはじめて仕立ててもらったスカート、闇米、パンパンの女の人のスカーフや口紅。焼け跡の夕日。ぴかぴかの赤い靴。パソコンを開けば概要だけは殆ど手に入れられる私たちの脳みそは情報に浸りきっている。だからこそこの芝居で、生きている人の体から溢れてくる実感として戦争を感じたいのだ。脚本の中に沢山溢れている喜びや悲しみを共に感じたかった。魂が震えるような思いを伝える……そのために演じる側はどうあるべきかを深く考えさせられた。

もうすっかり大人になっているだろうアキコを、別れたときの子供の姿のまま、他の子供の姿に重ねて、見つけたと勘違いしてしまうラストの成田空港でのひとこまで、当事者にとって、それがどんな時を経ていたとしても途切れたその時のまま、いつまでも心の中に色鮮やかに刻まれているのだと思い知り涙が出た。

「確かにあったんだ。忘れちゃいけない。」この台詞が心に響く。そうだ。今、私が踏んでいるこの土の上、この国で戦争があった事を忘れてはいけない。

同じ神奈川で芝居をする仲間としてこの芝居が横浜から発信されることを誇りに思う。大切な芝居であり、これからも上演してほしい芝居であった。　［劇団川崎演劇塾：藤田るみ］

神奈川県演劇連盟加盟団体の記録（50音順）

●演劇プロデュース『螺旋階段』　●京浜協同劇団　●劇団蒼い群　●劇団河童座　●劇団かに座　●劇団川崎演劇塾　●劇団きさく座　●劇団こゆるぎ座
●劇団ひこばえ　●劇団葡萄座　●劇団麦の会　●劇団やぶさか　●劇団横綱チュチュ　●劇団よこはま壱座　●風雲かぼちゃの馬車
●まりこ☆みゅーじあむ　●横須賀市民劇場プロジェクト　●横浜小劇場　●ラゾーナ川崎プラザソル　●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/　演劇資料室HP：http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/

DRAMA かながわ〔第61号〕　発行日：2011年３月25日　発行：神奈川県演劇連盟　編集：安次嶺里絵子（劇団横綱チュチュ）